

Transcultural Studies *Newsletter*

No 4

Autumn 2019

〈教員エッセイ〉

A Passage to Chichester

小田島恒志

〈学生エッセイ〉

Yale Summer Session

— A Summer Experience that Made Me Proud of Myself —

SHIMOYAMA Ami

日米学生会議—世界における自分の立ち位置—

野澤 玲奈

〈特別寄稿〉

多元の楽しみ方、多元の学び方

似鳥 雄一

《論系室だより》

LA（ラーニング・アシスタント）@論系室

2019 年度 論系夏合宿特集

多元文化論系
ニューズレター

第四号

第Ⅰ部 学生研究発表会(12:15~15:15)

- ・アメリカ文化論ゼミ
- ・イギリス・アイルランド・英連邦諸国ゼミ
- ・地中海文化論ゼミ
- ・日本文化史ゼミ
- ・東アジアの生命観と倫理ゼミ
- ・中東・イスラーム文化論ゼミ
- ・Seminar on Diversity in Japanese Culture
- ・Seminar on Performing Arts Culture in Japan

第Ⅱ部 研究発表会(15:30~16:30)

①矢田 陽子(本学非常勤講師)

「米国へ:「運び屋・ミュール」
中米コロンビア女性の表象から見えてくるもの」

②久住 康熙(本学文学研究科 修士課程)

「フランス帝国主義の協力者達:
エジプトとハイチの事例から」

懇親会(17:00~)

予約不要
来聴歓迎

2019年10月26日(土)
戸山キャンパス 34号館 151教室

〈問合せ〉多元文化論系室(39号館9階906号室)

Tel: 03(5286)2979 E-mail: sdc.admin2007@gmail.com

〈共催〉本学文化構想学部多元文化論系、

本学総合人文科学研究センター「グローバル化社会における多元文化の構築」部門

A Passage to Chichester

小田島恒志

思い立って、チチェスター (Chichester) へ行くことにした。チチェスターというのは、ロンドンから南西へ、現在プレミアリーグで活躍する吉田麻也選手のいるサウサンプトン行きの列車に乗って一時間半ぐらいのところにある街だ。これまで、現代イギリス演劇の翻訳を何本か手掛けてきたが、たいていはロンドン発の作品だった。あるいは、夏に演劇祭のあるエジンバラ発か。だが、ここ最近、このチチェスターにあるチチェスター・フェスティヴァル劇場で初演されて、好評につきその後ウェスト・エンド (ロンドン) に移ってきた、という戯曲を何本か見かけるようになった。これは気になる。これまで二度の長期滞在中 (30 年前のロンドン大学大学院留学時代と 15 年前の特別研究期間) には名前も聞いたことのなかった、『〇〇の歩き方』にも紹介されないような小さな街だが、劇場も含めて、ぜひ一度この目で見てみたい。丁度、前に別の芝居の翻訳を手掛けたことのあるニコラス・ライトの新作が掛かっている、ということもあって、今夏のイギリス行きの予定にチチェスター行きの一泊小旅行を組み込んだ。

以前、研究期間をロンドンで過ごしていた時は、このぐらいの距離は車で出かけるのが常だった。ちなみに、それまで 20 年以上、日本国内では JAF (日本自動車連盟) を呼んだことがなかった (つまり、事故も故障もなかった) のに、ロンドンにいた一年の間に AA (英国自動車連盟) には 3 回もお世話になった。2 回はパンクで、1 回は運転中にシフトレバーの下から煙が出てきた時に。恐るべし、英国製品。中古だったけど。

今回は、電車で行くことにした。それも、とりあえずロンドンの宿に到着く、ということをしないうで、ヒースロー空港からそのままチチェスターに直行することに。これが失敗だった。なんとなく、大きなスーツケースを持ったまま電車の旅をしている人の光景が目に見え、それもいいかな、と思ったのだが、そのイメージはもっと長距離の、ゆったりとした電車の中のものだった。サウサンプトン行きの電車は、いわば通勤列車のようなもので、スーツケースを置く専用のスペースがないだけでなく、網棚にも座席の足元にも置きようがない。かといって一時間半立ちっぱなしも辛いので、とりあえずボックスシートの通路側に席を取り、スーツケースを脇に置いたら、完全に通路をふさぐ形になってしまった。しかも、駅に停まるたびにどンドン



濃い色（本当は緑）のところが1等「部分」

人が乗ってきて、結構、混雑してくる。気まずい。迷惑この上ない。

もう一つ失敗があった。乗車券は翌日の帰路も併せてリターンチケット（往復切符）を買ってあったのだが、英国の鉄道の往復

料金は驚くほどお得で、片道料金の1.2倍くらいで購入できる。これに気をよくして（気が大きくなって）、帰りの列車はFirst Class（1等）を予約してあった。これもイメージの問題である。昔から、小説や映画に列車移動の描写が出てくると、1等車の乗客と2等車の乗客がはっきりと区別されていて、階級社会らしさを感じられたのだが、これまで自分が1等車に乗ることなど、機会も財力もなかった。が、今回渡英前にWEB上で切符を予約しようとしたら、あれ？というほどの廉価で1等が購入できることが分かり、すぐに飛びついた。本当は往復ともにそうしたかったのだが、往路の1等はすでに完売だという。で、復路だけ1等を買ってあった。オリエント急行みたいな車両を想像して、密かにわくわくしながら…

ところが、帰りの列車も恐らく今乗車した行きの列車と同じ形式だと思うのだが、どこにもそれらしき車両が見当たらない。何ぶん、通勤列車みたいなものだから。それでもよく観察すると、たまたま1番前の車両に乗っていたのだが、車両の前の部分（約4分の1程度）が、ガラスの扉で仕切られていて、First Class と書いてある。え、そこ？ しかも、混んできたところで乗客の一人が「なんだ、そっち空いてるじゃないか。First? 知ったこっちゃねえ」とかなんとか言いながら入っていき、たちまち満席になった。ああ、オリエント急行の夢が…

それでも、チチェスターの駅に到着し、わくわく気分を取り戻してタクシーに乗り込み、「Chichester Inn まで」と予約してある宿の名前を運転手に告げると、「は？」と言う。「ホテルですよ、ホテル」「は？」「チチェスター・イン、っていうホテル」「は？」そんなばかな…「確か、住所は West Street だったか…」「あ〜あ」ようやく出発。発音が悪かったのかな…到着してみると、

そこはこじんまりとしたパブだった。
あ、そうか、気が付くべきだった。これまでにも、いわゆるパブの2階が宿泊施設になっている宿には何軒も泊ったことがあったが、今回は「Hotel」のサイトで見つけた1軒だったので、

てっきりホテルだと思っていた。そう言えば、街の中にある宿の選択肢は数軒しかなかったような…もしかしたら、芝居を見るためにわざわざこの街へ来る人なんてそんなにいないんじゃないか…そう思いながらチェックイン



2つの劇場

後、宿を出て、劇場へ向かうと、メインストリートの人通りもほとんどないことに気づく。途中立ち寄った、宿とは別のパブでとった食事、昔ながらの英国料理らしく、お世辞にもおいしいとは言えない。すっかりわくわく気分が消えて、劇場にたどり着くと、ああ、なるほど、劇場前には広大な駐車場があり、膨大な数の車が停まっていた。この街へ芝居を見に来る人は皆、宿はとらずに車で来るものなのか。あんなに街中では人の姿が少なかったのに、劇場は人であふれている。しかも、ここには大きなチチェスター・フェスティヴァル劇場と小さなミネルヴァ劇場という2つの劇場が向かい合って建っているのだが、どちらも満員だった。うん、今度来るときは車で来よう。

さて、肝心の芝居だが、期待してたほどの良作とも思えず、終演後、車で帰っていく大勢の人たちを尻目に、人通りのほとんどない暗い道を歩いて宿に戻った。身も心も暗く重たくなって。部屋が思いのほか居心地がよかったのがせめてもの救いだった。

いや、救いはまだある。翌朝、パブ内で頂いた朝食が、予想外においしい。なんだ、夕食もここで食べればよかった。帰りは駅まで歩いてみると、通りは大勢の人で賑わっている。え？ 普通に観光地じゃないか。気分まで明るく楽しくなり、予定外に大聖堂の「観光」までしてしまった。ロンドンまでの列車もなぜかガラガラで、我が「1等車」、もとい、「1等部分」は貸し切り状態だった。やっぱり、また来るときも電車でいいかな。

Yale Summer Session

— A Summer Experience that Made Me Proud of Myself —

SHIMOYAMA Ami

How small are Waseda and my surroundings in Japan. This was my first and last impression of Yale. Beautiful sculptural buildings all over astonished me, and it seemed as if the whole town were a part of the university. Everything seemed shining with the sunlight and, moreover, I was nervous just thinking that I was entering an Ivy League university.

The reason I chose Yale was because I wanted to challenge myself, and also to compare the east and west coasts of the United States. Since I used to live in California with my family during my childhood, I was familiar with the west coast. But I only had vague memories of the east coast, where I had visited many times. I could have chosen UCLA where I had many friends, but to make the most of my summer, I knew that I had to place myself in a new environment. Furthermore, since I had visited Stanford, one of the top universities of the west coast, I wanted to get to know and experience a top-level university of the east coast as well.

Our first day of classes started off with a test, and from the next day, we began our reading/writing, listening/speaking, gender, and film classes. The R/W class covered George Orwell's book, 1984, and had vocabulary tests as well as discussions and essays. For the L/S class, we learned philosophical themes and shared facts about our own countries. In the gender class, we watched American movies from an academic perspective and contemplated the roles of women and men. Finally, for the film class, we made a whole music video using songs by Taylor Swift, and I played the role of editor, actor, and producer. It all began very smoothly, and I was looking forward to fun summer days filled with new friends, inspiring professors, and good grades.

Things did not go so easily. Quite soon, I began to struggle with my grades and was forced to acknowledge how empty my head was. My limited knowledge of civics and history stumped me when reading through 1984, and my poor vocabulary affected my reports. My lack of experience sometimes precluded me from actively participating in discussions. My classmates were mostly from the smartest universities in their countries, and my confidence as a Waseda JCulP student and as a competent English speaker almost



disappeared completely. Being away from JCulP and missing my friends made it worse.

Despite being one of the most difficult times, my time at Yale was, at the same time, one of the most special and fruitful days of my life. One thing about academic studies is that I realized that what I have been learning at JCulP can be applied over the world. It made me happy that I was a student and studying at JCulP. Moreover, I was able to study what I wanted to. I began to take an interest in the relationship between patriotism and war, and decided to write a report on it. The research and writing process was exciting. I felt that I got to know George Orwell so well through reading 1984. Another highlight was that I met many people who were interested in Japan. One of my professors' families loved Japanese anime and I had a chance to chat with them over lunch. I smiled when one of my classmates told me how much she loved shiba-inu. When I wore a yukata at a party, my friends asked me many questions and told me it was beautiful.

Another thing that made Yale special was that I came to like myself more. There was a chance to present on what I was proud of about myself, and this allowed me to look back at my efforts through my life. Reflecting on my efforts now, I can say that my recent big achievement was this summer, when my grades changed dramatically. My first report's grade was shocking, and so I studied intensely to improve myself, and eventually received an A on the last report. I am proud of my efforts, driven by my initial regrets.

From this priceless summer experience, I realized the happiness of sharing about Japan and developed strong feelings that I want to share and know more. The people, environment, and lessons cannot all be recalled, but the memories and encouragements my friends and I share on social media today is my source of energy.

(JCulP 1st Year JS)

日米学生会議

—世界における自分の立ち位置—

野澤 玲奈

この夏、私が参加した第71回日米学生会議は、社会における自分という根本的な問題について考えるきっかけをくれました。参加者のみならず、講演や訪問などで出会った人と関わる中で、新たな視点や意見にぶつかり、批判されることもありましたが、自分の価値観に挑戦することができました。そして、それ以上に、本音の対話を通じて夜通し語り合った参加者とは、今後もしばらくお互いを支え合える仲になったと思います。

私がこの会議に参加するきっかけを作ってくださったのは、国際日本文化論プログラムの母親のような存在で心から尊敬する由尾瞳先生でした。先生もこの会議の元参加者であったことから、以前からその魅力については伺っていました。人生の12年間を外国で過ごし、小学校高学年から中学校卒業までをインターナショナルスクールで学んできた私は、この会議を通して自分のアイデンティティについて考え直したいと思いました。当初は様々な専門分野を持つ優秀な学生が知識をベースに議論をするものだと思います、自分の未熟さに不安を感じ、参加に対して尻込みしていましたが、会議について調べる中で、知識を蓄えるということ以上に、参加者一人一人の経験や感性からくる本音の対話を通して、自らの未来と世界の未来について、とことん考える場所だと知りました。そこで、話すことと考えることが大好きな自分にぴったりであると感じるようになりました。

本会議が始まると、政治学、法学、国際関係学、医学、薬学、文学など、普段はそれぞれまったく異なる分野の勉強をしている学生が集まり、お互いの価値観の違いに驚きを感じる毎日でした。特に「国益」に重点を置いた考え方をする社会学系の学生との議論は、「個人」を中心に物事の解釈を行う自分の考え方とは大きく異なり、幾度となく白熱した議論になりました。時には、「文学」や「文化」を学問として学ぶことの社会的意義を、医学や軍事を専門とする学生に問われることもありましたが、このことがきっかけで、文学や文化は社会を映し出す鏡であって、政治など国家の意思決定に密接に関わるものであると自分の中で再認識することができました。このように、相手に自分の意見を伝えていく過程の中で、考えの根源や正当性を吟味し、異なる意見が混在することの大切さと美しさを実感することができました。

この夏、私は世界における自分の立ち位置を知ることができました。まったく異なる専門を持つ同年代の人々とともに、私なりにできることをして社会の役に立ちたいと思うようになりました。そこで、こんなきっかけをくれた日米学生会議を次の世代へつなげるべく、来年度の実行委員になりました。今は来年アメリカにて開催される第72回日米学生会議の準備をしています。多元文化論系の学生の皆さまのご参加をお待ちしております。



【日米学生会議とは？】

日米学生会議（Japan-America Student Conference = JASC）は、日本初の国際学生交流プログラムとして 1934 年に発足した。85 年の歴史を持つこの会議は、日本人とアメリカ人の学生が 3 週間の共同生活を送りながら様々な政治的、社会的なテーマについて議論するものである。宮沢喜一元総理大臣、ヘンリー・キッシンジャー元米国務長官をはじめ、様々なフィールドで国際的に活躍する人材を現在まで輩出し続けている。

(JCulP 3rd Year JS, Seminar on Diversity in Japanese Culture)

□ 71 □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ 72 □ □ □ □

日程：2019 年 12 月 7 日（土）14 時開場、14 時 30 分開演（3 時間予定）

場所：明治大学駿河台キャンパス

リバティータワー 1001 教室（地下 1 階）

主催：一般財団法人国際教育振興会

参加申込フォーム：<https://forms.gle/jNCCz5j38fL6BA9JA>

問い合わせ先：jasc71.72report@gmail.com（報告会担当）

多元の楽しみ方、多元の学び方

似鳥 雄一

私は多元の卒業生でも、多元の専任教員というわけでもありません。が、2013 年度から 3 年間、多元の助手を務めていたことがありまして、そのあとは、非常勤講師として多元の授業を受け持ったこともありました。そして現在は文学部の日本史コースで講師をさせてもらっていますが、広い意味で、多元の OB を名乗っても許されるでしょう。

ということで、数年間にわたって多元の様子を見守ってきたわけですが、多元にはいろいろな学生さんがいました。私が目撃した限りの、狭い範囲のことではありますが、ちょっと思い出してみましょう。

どこかの国会議員がぶっこわすなどと言っている超有名企業に就職していた人。体育部の活動を続けながら、優秀な成績をあげて卒業式の総代として指名された人。在学中に名の知れた文学賞を史上最年少で獲得、売れっ子作家になってしまった人。学内で最も権威ある学術賞をもらって、活躍の場が宴会だけではないと知らしめた人。居心地が良すぎたのか論系室に毎日のように顔を出し、卒業後もイベントごとに来てくれた人。居心地が良すぎて論系室で昼間からイケないものを口にしてしまい、終電の時間まで床で寝そべっていた人。

思えば、33 号館のうち高層棟が先に建て直されて、真新しくなった論系室で、私も助手として新たな仕事を始めたのでした。あそこでの 3 年間、やはりいろいろなことがありましたが、基本的には、楽しいことが多かったように記憶しています。

なぜ論系室が楽しかったかというと、世界中のいろいろな時代の、いろいろな地域を専門にされている先生方が寄り集まっているというのが大きな理由でしょう。だいたいどの先生も、海外出張に行くと元気になるとおっしゃって（たとえどんなに空気の汚い某国の首都であっても！）、現地で見聞されたことをいろいろと教えて下さったものです。その点は先生方だけでなく、（当時の職名ですが）助教・助手の皆さんもそうでしたし、論系室の運営を手伝ってくれた大学院生の TA もそうでした。あそこは私にとって、一種の擬似海外旅行空間だったのかもしれない。

実はひそかな楽しみだったのが、多元文化学会の懇親会でした（今もあるのでしょうか?）。そこで出された早稲田『たかはし』の仕出し料理もよかつ

たわけですが、いろいろな話を聞くことができましたし、そのあとは2次会へなだれ込むのがお決まりで、翌朝までやっていたこともありました。

あとは学期末になると、慰労会や打ち上げなどと称して、論系室に出入りしているメンバーでよく飲み会をやったものです。個人的には、当時助教の川浩二さんが教えてくれた神田『味坊』

が最高でしたが（メンバーのなかには羊肉が苦手な方もいて申し訳なかったですが）、川さんは中国の小説から日本のサブカルまで本当に話題の尽きない方で、多元の卒業研究の指導をするにはうってつけの方でした。

ですから、学部生の皆さんも、用事がなくても遠慮なく論系室に足を踏み入れて、そこにいる人たちと無駄話の一つでもすれば有意義な時間が過ごせる（逆説的な表現ですが）のではないかと思います。

とはいえ、こういった多元の魅力に気づくには、世の中のことについてある程度の知識を蓄えている必要があるのかもしれませんが。つまり地球上の古今東西のことを学べるといっても、その際に軸足のようなのが定まっていた方が、その価値をより深く理解できるように思います。

私自身のことを思い返しても、国際情勢への関心が強まったのは最初に学部を卒業してからでした。もっとも、あの頃は9.11テロの発生があり、その影響が強烈だったこともありますが。あの日の夜、勤務先から帰宅した私がテレビをみると、例のジェット機が高層ビルに突っ込む映像が目に飛び込んできました。今の学部生でこれをライブでみた記憶のある人は少ないと思いますが、私にとっては世界的な秩序の崩壊を危惧させるに十分なものでした（多元ホームページのどこかにも9.11関係の画像があるはずです）。

それから20年近くが経過した現在、ネット社会の拡大と深化のおかげで、海外の情報は21世紀初頭と比べても格段に手に入りやすくなっているでしょう。しかし玉石混交であることはいうまでもなく、それらを活かせるのもリテラシーあってこそのこと。下手をすると、情報に溺れてしまうことになるのでしょう。まあ、スマートフォンどころか、携帯電話すら持っていない人間からいわせてもらおうと（私が持っている通話機械はもうじきなくなるPHSというやつです）、本当、ネット社会との付き合い方はよくよく考えた



論系室での懇親の様子



助手時代の貴重な写真（筆者左端）

うになるからでしょうね。自分の足元を掘っては広げ、掘っては広げと、そうやって人間は知的な世界を広げていくのでしょうか。

近年の日本史界隈では、よく反省の弁として「タコ壺化」なる言葉が使われます。高度な専門化が視野の狭窄化をもたらすという意味ですが、それは研究でも他のことでも、ある程度は仕方ないでしょう。問題は、いつ意を決してタコ壺から出ていくかということであって、私も今後は中世だけでなく古代や近世、さらに海外の歴史へと視野を広げていこうと企てています。

ところで、先ほど「最初の学部」などを書いてしまいましたが、実は私、同じ大学の学部を2つ卒業しています（うち1つはもうなくなりましたが）。一度社会に出てから大学に戻った変り種です。その辺の話は昨年出版された著書のあとがきにも書いたのですが、20世紀末の前後に就職氷河期というのがありまして、あれこれ考えた末の結果がこれです。あの頃から、日本社会では一本道の人生設計が徐々に崩壊してきていますが、それは「雇用の流動化」という名目のもと、これからもさらに進む可能性があります。

昨年、そんな私の経歴からか、多元を卒業して大学院に進学されたある方から、こんなご相談を受けました。修士課程に在籍中で、今後も学問を続けたいが、経済の問題があり、家族の視線もある。いったん就職することも考えているのだが、どうだろうか、と。私はそれもありだろうとお答えしました。先日、またその方にお会いしましたが、就職に成功して、将来の大学院復帰にも会社から内諾をもらっているそうです。

このように考えてくると、多元で学んだことの真の価値は、生涯かけて理解していくものなのかもしれません。人によっては、寄り道や回り道もいいでしょう。人生に「正解」なんてないのですから。

（2013～2015年度多元文化論系助手。現在、日本史コース講師）

方がいいと思いますが。

と、ちょっと話が横道にそれましたが、研究のことでは、私の専門は日本中世ですが、それなりに当時のことが自分の頭の中で像を結ぶようになってくると、他の時代、他の地域のことも頭に入りやすくなってきます。既知のこととの比較のなかで考えられるよ

《論系室だより》

LA（ラーニング・アシスタント）@論系室

多元文化論系での学びは、異なる国や地域に跨がる問題を考えたり、各地特有の事象を専門的に掘り下げたりと実に多様で複雑です。また、留学を志望する学生や大学院進学を検討する学生も多く在籍しています。論系としては、そうした皆さんの学習のサポートや様々な相談に応じるため、LA（ラーニング・アシスタント）制度を導入しております。現在は、専門とする地域も分野も異なる、8名の大学院生がLAとして協力してくれています。

LAは、論系室（33号館9階）にほぼ毎日常駐し、多元文化論系の学生のみなさんが相談に来るのを待っています。相談内容も、学生生活に関わることなら何でもかまいません。辞書の引き方から、参考文献の探し方、レポートの書き方から留学の相談まで。LA自身の専門と異なる分野の相談であっても、その分野の先輩や先生方への橋渡しをしてくれます。また、論系室にはLAのほか、論系室スタッフ（講師、助手）も日替わりで在室していますので、幅広く、さまざまな相談に対応できます。

以下、今年度実際にLAを務めている人たちのうちの3人に、LAの仕事の様子を語ってもらいましょう。

事前に予約などは必要ありません。

1. LAのみなさんにとって、「多元文化論系」のイメージはどんなものですか？

大江： グローバル化が進む現代にあって、「多元文化論系」という名称からは時代に即したコースだなという印象を持ちました。僕はJCulPのTAも兼ねているので、そのイメージが強いかもしれませんが。

崔： 僕も「グローバル」というイメージがあります。多元文化論系のスタッフさんや他のTA・LAの方でも第二言語を習得されている方が多いですし、論系のプログラム構成やゼミで学べる内容も洋の東西を問わずという感じなので。

宮本： 私もそのイメージは強くあります。それに加えて、「学際的」という感じもします。先生方も様々な専門分野を研究されている方がいら

っしゃいますし。日本語は当然ですが、「多言語」が使用されている感じです。

崔： ただ、外国語を学ぶのにはモチベーションが必要ですね。私自身中国からの留学生で、日本にやってくる前から日本語を学んでいましたが、それも日本の文化に興味があったからこそ続けられたと思います。



宮本： そうですね。単に外国語を学ぶというよりも、折角ですから背景にある文化について知識を深めたいというのはありますね。この論系はそういうことができる場所だと思います。

2. みなさんが指導を受けている多元文化論系の教員について教えてください。

大江： 小田島先生は、学部生に接するときとほとんど変わりません。大学院の演習でも、いつもユーモラスで冗談を挟みながら授業をされます（笑）。

崔： 吉原先生は、本当に中国に精通されています。研究領域も、1000年ほど前の思想についてで、学部でも「思想文化論ゼミ」という名前ですが、実際には中国の歴史だけでなく、現代の事情にも明るい方です。大学院では中国の写真を見ながら過去の風景との違いなどについても話されるくらいです。私は中国からの留学生ですが、中国



に関して私よりも吉原先生の方が詳しいのではないかと思います（笑）。

宮本： 佐藤尚平先生は、学生に寄り添って指導して下さいるイメージです。研究の手法や設計図などこちらの段階に合わせてその都度適切なアド

バイスをしていただけるので、本当に勉強になります。ご自身はそんなにすごい経歴の持ち主なのに（笑）。また中東といっても、単に中東だけに目を向けるのではなく、ヨーロッパの帝国主義との観点なども話されています。他にも中東のスポーツの歴史なんてことまでご存じです！

3. 多元文化論系で LA を経験して、自身、何か得るものがありますか？

大江： 学生対応で言うと、JCulPで感じましたが、明確な目的を持ってLAを訪ねてくれるとやりがいがあります。

崔： そうですね。自分の専門とは違うことを尋ねられるときもありますが、それでも基本的な研究手法などについては共通する部分もあるので、何かしらのアドバイスはできると思います。また自分にとっても違う専門の話を聞くのは勉強になります。

宮本： それは思います。専門外の人への対応で自分自身の問題意識が明確になりますよね。おそらくそれは学部生の皆さんも同じだと思うので、ゼミの発表などで漠然と不安に思うときなどは積極的に利用してほしいなと思います。ここは設備もすごく充実していますし（笑）。

崔： 本当に。ときどきコピー機や PC など機器に慣れていない方もいますが、どんどん LA にも声をかけてください。

大江： そうですよ。コピーの取り方なども初めは不安に思うこともあると思うので。基本的に何でも対応します！

- ・ 大江公樹さん（大学院文学研究科 英文学コース）
- ・ 崔 鵬偉さん（大学院文学研究科 東洋哲学コース）
- ・ 宮本佳美さん（大学院文学研究科 中東・イスラーム研究コース）



2019 年度 論系夏合宿特集 学生合宿委員の声

多元文化論系では、2019 年 9 月 10 日（火）から 9 月 11 日（水）までの二日間、軽井沢セミナーハウスにて夏合宿を開催しました。今年度は、4 年生から 1 名、2 年生から 2 名、学生合宿委員として協力してくださり、レクリエーション企画を中心に、合宿を大いに盛り上げてくれました。ここでは、委員の皆さんの声をお届けします。



守谷梨才乃

今回の合宿は 2 年生の参加者が多く、どこのゼミに入ろうか悩んでいる 2 年生と話すことはとても良い刺激になりました。私自身も自分のゼミを紹介する立場になって改めて実りのある学びをしていきたいと思いました。

多元文化論系の先生方は終始和やかでしたが、卒業論文のテーマについて論じる場面では非常に鋭い意見や、学生には思いつけないような視点から具体的にどのような論じ方だと書きやすいのかなど、2 年生はもちろん、3 年生にとっても興味深い話をしてくれました。私の印象に残っているのは自分の興味のある分野（スポーツ、音楽など）と社会問題を結び付けて考えることで自分らしい卒業研究になるというお話です。ぜひ参考にしたいと感じました。

軽井沢を訪れるのは小学生のとき以来だったのですが、やはり東京とは違う広いグラウンドや、木々に囲まれているとのびのびとした気持ちになれました。セミナーハウスのご飯はとても美味しかったです。

（イギリス・アイルランド・英連邦諸国ゼミ 3 年）

須藤 瑠美

今回の合宿には合宿委員として参加させてもらいました。他の委員と夏休みの予定の合間を縫い打ち合わせを行い、何も参考にせずに描いた世界地図の正確さを競うゲームを企画したり、その下準備にアメ横まで行き国際色豊かなお菓子をゲームの景品として買うなど、合宿前から楽しい時間を持つことができました。私はもともとこの論系に所属する先生方や学生のことをあ

まり知らなかったのですが、この合宿を通して先生方の専門分野やゼミのお話を聞かせてもらったり、他の学生の関心分野を知ったり、新しく友人を知り合うなど、今後の大学生活の充実につながる収穫がたくさんありました。気持ちの良い自然の中で、サッカーやバドミントンをして体を動かしたこともとても良かったです。この実りある合宿の実現に関わった他の合宿委員、助手や講師の方々、参加して下さった先生方や学生の皆さんに感謝します。



(多元文化論系 2年)

竹内 愛真

私にとって多元合宿は非常に良い思い出となりました。普段授業でしかお会いできない先生方のお話をゆっくり聞くことができ、各ゼミの様子を知ることができました。私が春学期に履修した演習では二年生の人数が少なく、友達が作れずにいたため、今回の合宿で友達ができ、大変嬉しく思います。

一番印象に残っていることは、一日目の夜に行われた懇親会です。論系室の方々が準備してくださり、また先生方が用意してくださったビンゴの景品も魅力的でした。とても楽しい時間となり、先生も学生も話の尽きない様子でした。

二日目のレクリエーションでは複数の班に分かれ、何も見ずに世界地図を模造紙に描き、どの班が最も正確かを競い合うというゲームを行いました。



どの班も工夫を凝らして書いている姿をみて、合宿委員をやってよかったと思いました。

合宿を盛り上げて下さった論系室の方々、先生方、学生の皆さんに感謝したいです。

(多元文化論系 2年)

夏合宿概要

2019 年 9 月 10 日（火）～9 月 11 日（水） 軽井沢セミナーハウス

合宿スケジュール	
1 日 目	9:00・ 戸山キャンパス集合
	9:15・ 貸切バスで出発
	10:50・ 上里 SA にて昼食休憩
	12:45・ 軽井沢セミナーハウス到着
	13:15・ 受付、集合写真撮影
	14:15・ オリエンテーション、ゼミ・JCulP 紹介
	15:45・ 「ゼミ論ことはじめ」
	Room1 小田島先生、チャン先生、中澤先生、渡辺先生
	Room2 伊川先生、河野先生、高屋先生、吉原先生
	17:30・ 入浴・夕食・自由時間
	20:00・ 懇親会 ※恒例の多元オリジナル「国名・地域名ビンゴ！」
2 日 目	7:30・ 朝食
	9:30・ レクリエーション ※合宿委員企画「何も見ないで世界地図！」
	11:40・ 合宿のまとめ
	12:00・ 昼食
	13:00 現地解散

1 年生から 4 年生までの学生・教員 44 名が参加し、充実した 2 日間となりました。また 3 名の学生合宿委員が、企画・運営に参加してくれました。

1 日目は、まず教員と学生から、各ゼミと JCulP の紹介がありました。それぞれのゼミがどのようなテーマに取り組んでいるのか、先生やゼミ生の雰囲気など、普段知ることができない他のゼミの様子を知る機会となりました。また、これから

ゼミを選択する 2 年生にとっては大いに参考になったと思います。

その後は、毎年好評、教員数名によるグループで進められるワークショップ「ゼミ論ことはじめ」を実施。それぞれのワークショップでは、論文のテーマや議論の構成・進め方などについて、活発なディスカッションが行われました。まさに論文執筆中の 4 年生にはもちろんのこと、3 年生や 2 年生にとっても刺激的な時間になったことでしょう。

夕食後には懇親会が行われ、教員が世界各地から持ち寄った食べ物や飲み物、そして豪華景品をかけた、恒例のビンゴゲーム（多元オリジナルの「国名・地域名ビンゴ！」）を楽しみました。教員と学生、またゼミや学年の垣根を越えた学生同士の親睦が深められたと思います。

2 日目は、合宿委員主導による企画が行われました。グループ毎に、何も見ずに世界地図を描き、先生方が審査する、というまさに多角的（！）な企画で大いに盛り上がりました。その後は、軽井沢の爽快な空気の中でスポーツや散策を楽しんだり、ゆったりと DVD 鑑賞するなどして、各自思い思いの時間を過ごし、帰路につきました。

多元文化論系 LA 配置

多元文化論系の HP では、「論系室案内」のページで、下記のように LA の在室時間をそれぞれ自身の専門分野とともに記載しています。利用される際に参考にして、ぜひ興味のありそうな分野の LA がいる時間帯に来てみてください（ただし、LA の相談については、分野に必ずしもこだわる必要はありません——本文 11 ページ参照）。

※下の表は 2019 年度春学期の配置です。秋学期はまた変更になる可能性もありますので、最新の情報を確認してください。

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
3 限		史学 (西洋史)		中東・イスラーム (イラン)	中東・イスラーム (エジプト)
休み時間				文学 (英文学)	文学 (ロシア文学)
4 限			宗教・思想 (東洋哲学)		
休み時間					
5 限	宗教・思想 (東洋哲学)	宗教・思想 (東洋哲学)			
休み時間					
6 限					

〔編集後記〕

ニューズレター第 4 号をお届けします。

かつて多元の論系室の主（ぬし）ともいべき存在であった似鳥雄一さんが、いまはわたしの研究室と同じ階にある日本史コース室の主となっていて、廊下でしょっちゅう顔を合わせるので、是非にとニューズレターの原稿をお願いしました。感謝。

論系だよりでは、今回 LA のみなさんに登場をお願いしています。

第 4 号の編集においても論系室の佐藤 晃講師、寺嶋雅彦助手、杉田貴瑞助手にご協力をいただきました。〔源〕

多元文化論系 ニューズレター 第 4 号

2019 年 10 月 18 日 発行

編集代表 源 貴志

発 行 早稲田大学 文化構想学部 多元文化論系

印 刷 株式会社 正文社